2013年度入学試験問題

国　　語

（試験時間　15：00～16：00　60分）

1．解答用紙は，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。

2．解答は，必ず解答欄に記入してください。なお，解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。

3．解答は，**HB**の鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また，折りまげたり，汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。

4．解答用紙には，受験番号と氏名を必ず記入してください。

5．マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないよう特に注意してください。

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（50点）

ヒトのあらゆる活動は、脳の刻印を帯びる。酒を飲んでいる時の(1)カンゾウの機能には、ほとんど脳の影響はない。しかし、そもそも本人が酒を飲むに至った事情はと言えば、それは脳の機能に尽きるであろう。

天文学者が宇宙の彼方を観察しているときに、宇宙のそこで生じている出来事に、脳は何ら関係していない。しかし、その出来事を天文学者が観測しなければ、つまりそこで天文学者の脳が関与しなければ、そんな出来事はヒトにとって、存在しないも同然と言ってよいであろう。宇宙論では、ある物理定数を測定と計算の結果確定すると、そうして定数を決定した宇宙と、決定する以前の宇宙とは、異なったものになるという考えすらある。むろん、定数を決定するのはヒトの脳である。

ヒトが人である所以（ゆえん）は、シンボル活動にある。言語、芸術、科学、宗教、等々。これらはすべて、脳の機能である。われわれはお金を使い、衣服や帽子、アクセサリーを身につけ、車にお守りを吊るし、ゴルフ道具を担ぎ、碁やマージャンで暇を潰（つぶ）す。これらはすべて「具体化したシンボル」であるが、これもまた、すべて脳のシンボル機能に発する。

われわれの社会では言語が交換され、物財、つまり物やお金が交換される。それが可能であるのは脳の機能による。脳の視覚系は、光すなわちある波長範囲の電磁波を捕え、それを信号化して送る。聴覚系は、音波すなわち空気の振動を捕え、それを信号化して送る。始めは電磁波と音波という、およそ無関係なものが、脳内の信号系ではなぜか等価交換され、言語が生じる。

(2)　、われわれは言語を聞くことも、読むことも同じようにできるのである。脳がそうした性質を持つことから、われわれはなぜお金を使うことができるのかが、なんとなく理解できる。お金は脳の信号によく似たものだからである。お金を(3)バイカイにして、本来はまったく無関係なものが交換される。それが不思議でないのは（実はきわめて不思議だが）、何よりもまず、脳の中にお金の流通に類似した、つまりそれと相似な過程がもともと存在するからであろう。

ヒトの活動を、脳と呼ばれる器官の法則性という観点から、全般的に眺めようとする立場を、唯脳論と呼ぼう。ヒトが人である所以は、大脳皮質が発達するからである。そこからヒトのシンボル機能が発生する。ヒトの脳と動物の脳が異なることは、誰

でも知っている。ゴリラの脳とヒトの脳を机の上に複数個並べて見れば、素人でもただちに両者を識別するであろう。唯脳論は、ヒトとゴリラの差異を説明しようとする。

それだけではない。唯脳論は、ヒトの中にある差異を説明しようとする。ヒトは考え方の違いをめぐって大喧嘩をする。それが利害関係であるなら、まだ救いようがある。利害を調整すればよい。[(4)]、基本的な考え方の違いというのも、よくあることである。これは利害がかかわらないだけに、逆に調整が困難である。たとえば、人間の精神・心の問題を脳神経科学などで自然科学的に説明することは、とりあえずできない。多くの自然科学者は、そうした説明ができる時代が来ることを夢みている。だが、文科系の学者の多くはそう考えない。彼らは脳およびその機能は理系の研究対象だとみなして関心を払わず、もっぱら人文科学や社会科学の言葉によって人間の精神・心を理解しようとする。理科と文科という二つの文化があると言ったのは、C・P・スノーらしい。理科には理科の言い分があり、文科には文科の言い分がある。

ヒト、現代人つまりホモ・サピエンスは、ここ数万年ほど、(5)カイボウ学的、すなわち身体的には変化していない。ならば、おそらく、ヒトの脳の機能もまた、数万年このかた変化していないはずだ。千変万化する如くに見える学問分野も、脳から見れば、所詮は同じことをやっているはずである。理系と文系の差は、脳の使い方の違い、使う部分の違いに過ぎない。その機能形式にある定まった法則性があれば、そこに戻って理科と文科の話し合いがつくであろう。理科と文科が異なる言葉を用い、異なる前提を用いて議論しても、そこでは喧嘩が起こるだけである。

言葉とはなにか。大脳皮質連合野の機能である。それがブローカの運動性言語中枢を経由し、運動系から表出される。その表出された「言葉」から、「受け手」は自己の脳の中に、「送り手」の脳の中にあったものと、類似の機能を起こさせようとする。その伝達がほぼ完全であれば、「受け手」は「送り手」を「理解」する。「送り手」と「受け手」の脳内過程が、言葉のやり取りにも拘らず不一致のままであれば、両者に不満が残る。「受け手」は、「送り手」が何を言っているのか、よくわからない。さて、「受け手」がバカなのか、「送り手」がダメなのか。これが、人類社会のモメ事のかなりの部分を占める。

「送り手」と「受け手」の言い分をいちいち聞いて、判事役が裁定するというのが、ヒト社会のモメ事の解決では通例だった。

その際、「送り手」、「受け手」、判事に共通するのは、「言葉」である。理科系はそこに、いわば「物的証拠」を付け加えた。これが理科系の強みである。[(6)]、現在では、物的証拠は乱用され過ぎている。理科系の人は、科学には実証性がなくてはならないとまで言う。こう書いても、理科系の人なら、それで「なぜいけないのだ」と(7)フシン気な顔をするであろう。それが理科と文科の喧嘩のもっとも深い原因だと私は思う。

レヴィ＝ストロースは言葉の交換が、財物の交換と並んで、人類社会を成立せしめたと言う。財物、つまり早い話がお金であるが、これは言葉と同じように典型的な脳の機能である。言葉が脳の機能であることについては、よほどの臍曲がりでない限り認めるであろうが、お金はどうか。お金にまつわる全ては、じつはヒトの作り出した約束事である。私の給与とは、誰が決めたか知らないが、いまでは銀行の計算機に記された数字である。これが脳の機能でなくて何であろうか。そもそも計算機とは、脳の「意識可能な機能」の一部が、外部に表出されたものである。電気信号がわれわれの脳内を、それ自身は単なる電位変化に過ぎないのに、神経細胞のパルスとして飛び交い、最終的にある「意味」が生じるように、お金は社会の中を飛び交い、最終的にある「意味」が生じる。その動きは、脳内の信号の動きにそっくりではないのか。お金が担う「意味」とはなにか。その分析には、まさしく脳内の信号の「意味の分析」と同じ方法が使えるのではないか。

お金の動きの一方の端には、さまざまな情報分析がある。それは脳で言えば知覚系である。その知覚系の分析と指示に従ってお金が動く。お金の動きの他方の端には、人間や機械の労働、つまりエネルギーの消費がある。これはまさしく、脳で言えば運動系ではないか。労働の結果の賃金は、またしても知覚系に戻され、「どこにお金を使うか」という知覚系の判断にまかされる。それはいわば、筋肉からの深部知覚の入力に相当するものである。それなら、経済学者、社会学者の常識には、脳の機能があって当然ではないのか。

ヒトはなぜ社会を作るか。レヴィ＝ストロースは「交換」のためだと言う。そうかもしれない。では、なぜヒトは交換をするのか。その(8)キバンを成すものは脳である。脳は信号を交換する器官である。これこそが、ヒトが交換を行う理由である。ヒトが「無意識」に作り出すものは、ヒトの身体の投射となる。そうエルンスト・カップは言った。もっと正確に言おう。「ヒトの作

り出すものは、ヒトの脳の投射である」、と。社会もまた然りである。

他方、理科系の学者は、考えているのが自分の頭だということを、なぜか無視したがる。彼らは真理が自分の外部にあると考え、それを「客観性」と称するのである。そういう人たちが、なぜ数学が得意なのか、私には皆目、納得がいかない。数学者が実験室で自分の数学を証明しようとした、という話を聞いたことがない。しかし、私は自分が理解できる範囲の数学が「正しい」ことを、いかにその数学がいわゆる「実証性」を欠いていても、信じている。「実証されなければ科学ではない」というのなら、数学を利用した科学の部分は、すべて科学ではなくなるであろう。

自然科学者たちの「研究の結果」、すなわちいわゆる業績は、彼らの脳の機能である。「実証されなければ科学ではない」。そう信じているのも、そう信じている人の脳である。数学の論理も、それがある形で脳内にあるからこそ、見つかるのである。

ヒトは「ロケットと同じ原理」で直立している。落語家の桂枝雀はそういう仮説を立てた。前に倒れそうになると、息を吐く。後に倒れそうになると、あわてて息を吸い込む。ある男が、この仮説を「実証」しようとした。証明のために、しばらく息を止めて立っていた。やがてこの男は、たしかにバッタリ倒れた。(9)「実証」とはしばしばこういうものである。

もちろん、かつてヒトは、実証され得ない観念を振り廻し、他人に多大の迷惑をかけた。歴史はそういう教訓に満ちている。それを過ちだと考えるか。それとも、ヒトとは「そういうものだ」と考えるか。私は後者である。なぜなら、前に述べたように、ヒトはおそらく五万年このかた変わらないからである。「実証されないものは語るに足らない」という実証不能な観念を振り廻すほど、私は観念論者ではない。その意味では、私はあくまで実証主義者である。しかし、私は、ヒトとは実証不能な観念にすら頼りたくなるほどに、弱い者であることは知っているつもりである。だから、ヒトから、シンボルの一つである宗教を切り離すことはできない。

いまとなっては、誰が神の存在を「実証」しようとするか。それが無益なことはわかっている。だから、実証主義者が出現する。なぜなら多くのヒトは、何らかの「神」なしでは生きられないからである。(10)［　　］。現代の実証主義者の言い分と、過去の宗教家の言い分とは、内容は違うが、形式は同じである。「お前の言うことは実証という名の神が許さない」と最後に述べ

るか、ただ単に「神が許さない」とのみ述べるか、その差に過ぎない。

（養老孟司『唯脳論』による）

注　C・P・スノー……イギリスの物理学者、小説家。　ブローカ……フランスの医学者で、大脳皮質の運動性言語中枢を発見した。　レヴィ＝ストロース……フランスの文化人類学者。　エルンスト・カップ……ドイツの技術哲学者、地理学者。

〔問一〕　傍線(1)(3)(5)(7)(8)のカタカナを漢字に直しなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕　空欄(2)(4)(6)に入れるのにもっとも適当なものをそれぞれA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

(2)　A　しかし　B　あるいは　C　なぜなら　D　もちろん　E　つまり

(4)　A　しかし　B　ましてや　C　むしろ　D　ただし　E　それゆえ

(6)　A　そして　B　ましてや　C　むしろ　D　ただし　E　もちろん

〔問三〕　傍線(9)「『実証』とはしばしばこういうものである」とあるが、この文で筆者は何が主張したいのか。本文中で紹介されている落語家の仮説を「仮説A」、常識的な仮説（息を止めていてバッタリ倒れるのは、窒息して気を失ったからだ）を「仮説B」とし、「仮説A」と「仮説B」という語を使って五〇字以内で記しなさい。（句読点は一字に数える）

〔問四〕 空欄(10)に入れるのに最も適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 「実証」も「神」も脳の機能である

B 実証主義者の神は「実証」である

C 観念論を脱却した「実証」は不可能である

D 「神」を実証することはできない

E 実証主義者を「神」から解放すべきである

〔問五〕 本文の全体を通じて、筆者が言語（言葉）について述べていることに合致するものにはA、合致していないものにはBの符号で答えなさい。

ア 言葉とは芸術や文化、科学の土台となるヒトの脳に特徴的なシンボル機能であり、これがたとえばゴリラとヒトの差異の指標となる。

イ それ自体としては神経系の電位変化に過ぎないものが、脳の遺伝的資質により一定の意味を持つものとなり、言語として表出される。

ウ 文科系の学者と理科系の学者は基本的な考え方を異にしており、一方が自分の脳内状態と同じものを他方の脳内に発生させようとしてもうまくいかないことがある。

エ 理科系の学者どうしが言語を交換するとき、送り手が自分の脳内状態と同じものを受け手に発生させるには、物的証拠が必要である。

オ 理科系の学者が用いる言葉と文科系の学者が用いる言葉が異なるのは、使用する脳の部分が異なるからであり、同じ部分を使用すれば相互理解が可能になる。

〔問六〕 本文中では、言語（言葉）とお金（財物）が対比され、説明されている。その説明をまとめた次の文章を読み、空欄（A～D）に入る適当な語を本文中から探し出して答えなさい。

本文は、社会におけるお金の流れが、［A］における［B］の流れに似ている、と主張する。すなわち、社会は［A］と類似し、お金は［B］と類似している、ということである。お金を使う人はいわば［C］で、お金を受け取ってその対価を提供する人はいわば［D］だ、という本文のたとえは、社会と［A］の類似性を示している。ここでは、財物の交換が行われる社会が、［C］と［D］を持つ一つの［A］と見なされている。他方、お金を通した財物の等価交換は電磁波と音波の等価交換に似ている、という本文のたとえは、お金と［B］の類似性に沿ったものである。財物の交換ではお金が等価性の単位となっているが、これと同様に、電磁波と音波の交換において［B］が等価性の単位となっている、との指摘である。

〔問七〕 次のア～オのうち、本文の筆者の考えと合致しているものにはA、合致していないものにはBの符号で答えなさい。

ア お金などの社会現象は人間の脳から発生したものであり、これらを文科系の学問が探求する際には人間の脳との関係を考慮すべきである。

イ 数学など実証できない科学も存在するから、科学には実証が必要だとはいえない。

ウ 理科系の学者がしばしば持ち出す「実証されなければ科学ではない」という主張は、それ自体実証できない。

エ 文科系の学問が実証の不要な科学であることは、脳の機能や構造を丹念に調べると説明がつく。

オ 「実証されないものは科学でない」という実証主義は、宗教と同様に、ヒトの脳の機能である。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（20点）

幸田露伴（慶応三年［一八六七］―昭和二十二年［一九四七］）は、その長い作家生活において数多くの著作を後世に遺した。しかし、後世の私たちは、彼に一定の敬意は払いつつも、その作品群を読むことには幾つかの障害を感じ、遠ざけてきたところがあるようだ。

露伴と私たちとの間にある〝壁〟を、思いつくままに挙げてみよう。まず、明治二十年代のはじめに小説家デビューを果たした露伴は、その時代の美文意識や、戯作臭の抜けきらない小説観の影響を、自身の小説作法に色濃く残した。そのため私たちは、何かがふまえられているらしい表現を前にして［(1)］を知らぬゆえのもどかしさを感じたり、勧善懲悪風の趣向に古臭さの印象を抱いたりするのである。

また、言い古されたことだが、他に抜きんでて広くかつ深い、彼の学識の問題がある。儒・仏・道の三教を始めとして、和漢の文学その他に関する露伴の厖大な知の集積は、それぞれの特定分野を専門とする研究者たちが、個々に関心を抱くことはあっても、とても一般的な興味の対象とはならないだろう。ましてそれらの知が一つの人格として統合されて存在したことの意味については、もはや誰にも想像がつかない。

とはいえ、右のような障害は、いってみれば目に見える〝壁〟である。もしその気になりさえすれば、いちいち辞書などを引いて用例を確認しながら読んだり、同時代の表現の水準との比較において露伴小説の旧さの中にある新しさを見出してみたり、各分野の入門書を手始めに一つひとつ勉強していったり、と〝壁〟に挑む道ははっきりしている（多少、目のくらむ思いはするが）。しかし、私たちと露伴文学の間には、こうした〝壁〟とは別に、もう一つ、目に見えない〝壁〟があるように思う。露伴の側の問題、というよりも、ひょっとしたら私たちの側にある認識障害に起因するかも知れない〝壁〟である。

それは、国民の創造という主題に関わっている。

今日、日本ないし日本人を、自然発生性と連続性の相において考える人は、もうあまりいないだろうと思う。それに代わって、

近代に入ってからの捏造の産物と、それらをとらえるのが、現代の主流である。国民、国家、伝統、個人といったタームは、主に〝つくられた〟という、受身形で語られるのがほとんどである。いわゆる国民国家批判の立場だが、この視点に立つと、露伴文学に対する或る種の認識障害が起こりかねないのではないか、と私は危惧するのである。この点について、露伴の傍らに夏目漱石を置いて、しばし説明してみたい。

なぜ漱石を持ち出すのかというと、彼は露伴と同年の生まれだからである（一時期、同じ中学校に通っていたこともある）。漱石の文学に、江戸戯作調の残滓が全くないのは、彼が二年余のイギリス留学によって近代小説の骨法を身につけたからである。だが、その文壇デビューが明治三十八年（一九〇五）に入ってからであることも無関係ではない。近代小説文体の模索がほぼ済んでいただけでなく、その時期にはもう近代小説文体に慣れた読者が出現していたのである。とはいえ、(2)は、もちろんそんなことだけに由来するのではない。

私はその理由を、二人の作家の、明治国家というものに対する態度の違いから、説明できるのではないかと考えている。ここでいう明治国家とは、明治二十二年（一八八九）に発布された大日本帝国憲法に基づく国家体制を指す。その終焉は、昭和二十一年（一九四六）である。

この国家は、それまで平和の裡にまどろんでいた日本社会を根底からゆさぶり起こした。そして西欧モデルに合わせた社会の大改造を断行し、東アジアに向けての膨張主義的侵略に乗り出した。当然、それは西欧列強との競り合い・敵対関係をもたらし、結果的に日本社会の全体を、崩壊に至らしめたのだった。

漱石の場合、こうした明治国家の在り方に対して、おおむね、無関心を決めこんでいたように思われる。時たま、「国家といふものが危くなれば誰だつて国家の安否を考へないものは一人もない」（『私の個人主義』）といったことを口ばしったりもしたが、しかし、では国家の危機とは何か、その時どういうふるまいが国民としてふさわしいのか、等々について、特に深い思索があったかどうか、大いに疑わしいと思う。これは、国家に対する、〝一種のイノセンス（無垢、あるいは無知）〟である。

その代わりに、彼は、国家の強権が途方もない大変容を強いた明治社会の諸相―その社会を生きた人々の不安と苦悩―に、

比類のない観察眼を向けた。明治社会がどのような問題を抱え込まされ、どんな矛盾に苦しまねばならなかったか、そうした過程の中からどのようにして個人が析出され、国民として構成されていったか、等々、漱石作品はそれら受身形の諸問題に対して、決定的な表現の幾つかを与えたのである。明治時代の日本社会が被ったこの苦悩は、近代化・産業化という二十世紀世界の不可避的な動向に由来する。ゆえに彼の表現は、現代の私たちの抱える問題とも、当然無縁ではありえない。(3)漱石の文学が、今なお現在形であり続けている所以(ゆえん)である。

露伴の場合は、これと少し違う。

露伴は、生まれたばかりの明治国家に対して、漱石に較べるとはるかに近しい態度をとった。それと無関係に生きるわけにゆかぬ以上は、できるだけの働きかけをして少しでも良い国にしてゆこうとする積極的な姿勢、といおうか。明治国家の成立とほぼ同時に作家生活に入った露伴は、この姿勢を、己れの文学の内実に組み込まざるをえなかったのでもあろう（彼が作家デビューした時、漱石はまだ一高生だった）。

明治国家が産声を上げた時、すでに露伴はその醜さに顔をしかめた。が、そうであればなお一層、ふびんなそれをより良く育てねば、と覚悟した。こんな国家でも、立派な国民が支えれば、何とかなるのではないか？　立派な国民を創ってゆこう……、(4)露伴にとって、国民は作られるものではなく、創るものだったのだ。

露伴文学は、こうした明治国家への配慮・働きかけといった要素を、その本質的な部分に含み持っている。それゆえに、明治国家の滅亡と共に、彼の文学は、漱石のそれとは対照的に、ゆっくりと、後世からの理解・共感を容易に得られるものではなくなっていったのである。

（関谷博『幸田露伴の非戦思想』による）

注　戯作……江戸中期以降に発達した俗文学。　残滓……残りかす。

〔問一〕 空欄(1)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 比喩　B 典拠　C 用例　D 引用　E 美文

〔問二〕 空欄(2)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 両者の学識に対する、私たちの理解力の深浅
B 両者の人格に対する、読者たちの尊敬の度合い
C 両者の文学に対する、私たちの親密さの温度差
D 両者の国家観に対する、私たちの信頼感の有無
E 両者の作品に対する、批評家たちの評価の違い

〔問三〕 傍線(3)「漱石の文学が、今なお現在形であり続けている」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 漱石はイギリスに留学することによって江戸戯作調から脱することができたから。
B 漱石の文壇デビュー時には近代の小説文体が成立してそれに慣れた読者が出現していたから。
C 漱石は国家の在り方やその危機における国民の態度などに対して常に一定の距離を保っていたから。
D 漱石は近代化を推進する二十世紀社会のなかで国民がどのように苦悩したのかを克明に描いたから。
E 漱石は西欧列強との摩擦によってやがて明治国家が崩壊する近未来を予想していたから。

〔問四〕傍線(4)「露伴にとって、国民は作られるものではなく、創るものだった」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　露伴にとって明治国家は批判の対象ではなく、小説世界のなかで表現を通じてあるべき姿を描きだすものだったということ。

B　露伴にとって明治国家は否定すべきものではなく、国民からはるかに超越した存在として畏敬する対象だったということ。

C　露伴にとって明治国家は望ましいものではなかったが、国民という存在は国家を担う一人としてそれを支えるべきだったということ。

D　露伴にとって明治国家は権力によって国民を支配する強大なものだったので、小説世界のなかで告発すべきだったということ。

E　露伴にとって明治国家はあわれむべきものだったので、そこで生きる国民は小説世界のなかで救済すべき対象だったということ。

〔問五〕次のア～オについて、本文の筆者の考えに合致しているものにはA、合致していないものにはBの符号で答えなさい。

ア　漱石は国家の強権にあえぐ人々の苦しみに深く共感して、主体的に働きかけを行うことで優れた小説表現を成し遂げた。

イ　漱石の作品は明治社会の矛盾の中から個人としての人間が誕生し、国民として構成されていった様相を描き出した。

ウ　露伴と現代の私たちの間には、比較的越えることの容易な壁と越えることが困難な二つの壁が存在している。

エ　同年生まれの露伴と漱石に明治国家への姿勢に違いが生じているのは、活躍期が異なっていることが影響している。

オ　露伴は明治国家の成立期に作家デビューしたため国益を優先させ、国民の真の姿を理解することができなかった。

三　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（30点）

鈴木龍は、糸竹の交はりにて年ごろ親しく語らひぬる仲なりけるを、この夏のころ、いささか心得ぬことのあれば、いきていひたださばやと思ふ折から、いと重くわづらふと聞けど、常にかよわき人にもあらねば、ほどなくおこたらむ(1)折にこそと思ひてうち過ぎぬるほど、にはかによわくなりてつひにみまかりぬ。よはひはことしいそぢとか聞きし。よろづたどたどしからず(2)、呂律のことなど、いとよう心得たる人にて、かばかりなるもたづねむにはいとかたかるべし(3)。をしみつつせむすべなく月日をふるに、こよひ雪いとふかう降りて寒ければ、とく伏しぬ。暁がたの夢に、この人とひくと見て、みまかりぬと聞きしはそらごとなりけり、重くわづらふにいかでかいませしと言へば、対面せでは心のむすぼほれとくべきやうも侍らず、心ひとつをしるべにてと言ふ、いとくるしげなり。かの心得ず思ひしこと言ひとくとぞ思ひし。雪のしづりの音に目覚めたるに、ともし火かすかに、嵐はげしく吹き落つ。涙玉を乱すがごとし。

思ひつつぬるともなきをなき人のさだかに見えし夢ぞあやしき(4)

ありしよのうらみもきえてしらゆきのふりにしひとぞさらにこひしき(5)

さめて後ことかよはさむ道をだに問はましものを夢と知りせば(6)

ありし世に、あしたの雪は消えやすし、夜の雪にはとひて糸竹の遊びせむと言ひしを思ひいでて、

雪の夜はかならずこむとたのめしを消えにし人や思ひ出でけむ(7)

（『六帖詠草』による）

注　糸竹……音楽。　呂律……音律。

〔問一〕 傍線(1)「おこたらむ折」・(7)「たのめしを」の意味としてもっとも適当なものをそれぞれA～Dの中から選び、符号で答えなさい。

(1) おこたらむ折

A 暇になったころ
B 怒りが薄れたころ
C 病が回復したころ
D しばらくたったころ

(7) たのめしを

A お願いしていた私を
B あてにさせたことを
C たよりにしていたのに
D 心強く思わせておいて

〔問二〕 傍線(2)「よろづたどたどしからず」とはどのような様子を言ったものか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 考え方が論理的で整然としている様子
B 起居動作がとてもきびきびしている様子
C どのような楽器でもそつなくこなす様子
D あらゆることにわたって造詣が深い様子
E 弁舌さわやかによどみなくしゃべる様子

〔問三〕 傍線(3)「たづねむにはいとかたかるべし」とあるが、それはどうしてか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 彼のように優れた人間は世間にめったにいないから
B 音楽の秘伝に関わることは簡単には明かせないから
C 音律に関して自分の知りたいことは高度すぎるから
D 彼はもうすでに遠い世界に行ってしまっているから
E 葬儀に間に合うように駆けつけるには遠すぎるから

〔問四〕 傍線(4)「あやしき」とあるが、どのようなことをそのように感じたのか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 自分が死んだというのは嘘だと彼が夢に現れて言ったこと
B 自分が懸念していたことを彼も同様に気に掛けていたこと
C 自分の思いが通じて霊夢をさずかりあの世の彼と会えたこと
D 完全に眠りに落ちたわけでもないのに夢らしい夢をみたこと
E 彼のことを思いながら寝たわけではないのに夢に現れたこと

〔問五〕 傍線(5)「ありしよの」の歌に用いられている掛詞を漢字二つの組み合わせで示すとしたら、左の中のどれとどれがもっとも適当か。二つ選んで符号で答えなさい。

A 夜　B 降　C 憂　D 世　E 恨　F 古　G 裏　H 白　I 振
J 知

〔問六〕 傍線(6)「ことかよはさむ道」とはどういうことを表現しているか、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 万事に及ぶ道理
B 専念すべき教え
C 心に通じる音楽
D 会話をする方法
E 呂律を正す極意